

歐洲大戰當時に於けるドイツ學者の 人口問題觀

南 亮 三 郎

一 序 說

時局に因み、交戦國が戦時及び戦後に於て遭遇することあるべき人口問題を思ひ浮べ兼ねて本問題の眞實の意味を理解するに役立たしめたいといふ如き心構へから、筆者は茲に聊か歐洲大戰當時に於けるドイツ學者の所論を回想して見たいと思ふ。

戦争と人口増加とが一體いかなる關係にあるかは姑く措くとして、この戦争が激烈且つ長期に亘るものであればある程、直接間接に益々深刻なる影響を人口状態の上に及ぼすものであるといふことは極めて自明の事柄である。死亡率はまづ著しく上昇し、婚姻及び出産率は激しく低下して、自然増加ではなく却つて自然減少をさへ全人口の上に現はすことあるべきは、史上に於ける幾多の大戦争がこれを繰返し證明してゐる。と同時に

に、停戦の後には或る要素は急激に、或る要素は緩徐に——兎も角も一定期間の後にはおのづから戦前の状態に復歸し來たるといふことも亦事實であつた。要するに一國人口は戦争と共に、謂はゞ人口の戦時状態に入り込むのであつて、夙に歐洲大戰の當初ヘルシュ博士の指摘せる通り¹⁾、この人口の戦時状態は交戦中の人口減退期と停戦後の人口恢復期との二期に分ち考へ得るのを常則とする。しかもこの二期にわたる人口の戦時状態は單に當面の交戦國だけではなく、戦闘行爲については局外にある中立國に於てさへ、多かれ少なかれ現はれて來るといふのが過去の經驗の示した所である。

然るに前後五ヶ年にわたる歐洲大戰は空前の規模に於て行はれた而かも恐らくは最初の近代的科學戰であつただけ、交戦諸國の人口に及ぼした影響は非常に深刻甚大なるものがあつた。委細は別の機會に譲りたいと思つてゐるが、ほんの一例を擧ぐれば大戰直後コペンハーゲンに於てドエリング氏の發表せる調査速報書の第三冊は歐洲主要交戦國の總括篇に當つてゐて、『ヨーロッパに於ける人間損失三千五百萬』²⁾といふのがその標題になつてゐる。三千五百萬といふ老大なる人間損失は無論、戰場に於ける壯丁の戦死數だけではなく、戦争の影響として國內で特に高まつた一般國民の死亡増加數、更に戦争なかりせば生れたであらう出産數の損失をも加算したものであつて、その國別細目は左表の通りである³⁾。この數字はヨーロッパに於ける主交戦國十ヶ國にのみ關するものであり、又その後細目については幾らかの修訂は加へられたけれども⁴⁾、ドエリング氏のこの情報は人口に及ぼせる大戰の影

- 1) Hersch, La mortalité chez les neutres en temps de guerre. 1915. — 國家學會雜誌 32卷2號(大正7年2月)に糸井靖之氏の紹介文あり。
- 2) Christian Döring, Die Bevölkerungsbewegung im Weltkrieg. 3. Heft: 35 Millionen Menschenverlust in Europa. Kopenhagen 1920.
- 3) Döring, ibid. S. 4 und S. 56.
- 4) Art. Bevölkerungswesen, IV. Der Einfluss des Krieges auf die Bevölkerungsbewegung und den Bevölkerungsstand, von Christian Döring (Handwörterbuch d. Staatswissenschaften Bd. II, Jena 1924. 4. Aufl. S. 697-728). — vgl. Karl Oldenberg, Der Bevölkerungsverlust im Weltkrieg. Ein Literaturbericht. (Sonderabdruck aus Schmollers Jahrbuch, Jahrg. 49. Heft 3. 1925. S. 73-135) München 1925.

歐洲大戰の人命損害

交 戦 國	戦 死	死 亡 増	出 産 損	計
ド イ ツ	2,000,000	700,000	3,600,000	6,300,000
オーストリア・ ハンガリー	1,500,000	500,000	3,800,000	5,800,000
フ ラ ン ス	1,400,000	440,000	1,500,000	3,340,000
イ ギ リ ス	800,000	200,000	850,000	1,850,000
イ タ リ ー	600,000	280,000	1,400,000	2,280,000
ベ ル ギ ー	115,000	85,000	175,000	375,000
ブルガリア	65,000	55,000	155,000	275,000
ルーマニア	159,000	201,000	150,000	510,000
セルビア	690,000	640,000	320,000	1,650,000
ロシヤ (ポーランドを含む)	2,500,000	2,200,000	8,300,000	13,000,000
總 計	9,829,000	5,301,000	20,250,000	35,380,000

り渡つた最大不安の國家問題の一つであつたのである。

歐洲大戰當時に於けるドイツ學者の人口問題觀 (南)

響一般を窺知せしむるには足るであらうし、又、かゝる戦禍に直面しつゝあつた交戦諸國、別してドイツやフランスの國內に於て當時の學者や論客がいかに眞剣に「人口問題」を論じ合つたかを想像せしむるには充分であらう。しかもこゝで想ひ合せねばならぬことは、大戰當時に於ける「人口問題」の重大さには更に、戦前數十年來持ち越したる出生率減退問題が加はつてゐたことである。別の機會に詳論せる如く、⁵⁾ フランスは早くも十九世紀の前葉より、残りのヨーロッパ主要諸國はその末葉より減退の兆を現はしたのであつて、世界市場を繞つてイギリスとの間に産業的覇權を争ひつゝあつたドイツでさへがこの世紀轉換期以來、學者は出生率減退問題を日程に上しつゝあつた。かくて、歐洲大戰は老なる人間生命を喪失せしむると共に、出生率上昇による常則的な自然的な人口恢復を殆んど絶望的ならしむるのではあるまいか、といふのが朝野に漲

5) 拙著・人口理論と國際貿易 (昭和13年10月大同書院刊) 第七章「世界人口の趨勢とその再生産過程」参照。

さて、かくの如き人口統計上の異變を背景にして大戰當時、多くの學者・論客の發表せし意見や對策がおしなべていかやうの方向に向いてゐたかは讀者のよく察知し得らるゝ所であらうと思ふ。政治家や軍人や醫學者の見解は特に取り立てゝ述べる迄もないが、博識の經濟學者ジード教授でさへ大戰第三年春の一論文⁶⁾に於て、「吾々が目下の大戰争によつて最も痛切に學んだ教訓は、つまり一國の優勝はまづその人口數の大なることによつて定まるといふことである。一國の人口數の大なることは、常に戰場に於て直接にその國の優勝を證明するのみならず、中立國の意向や世界の輿論の上に及ぼす影響に於ても亦これを示してゐる」と説いたのであつた。かくて何よりもまづ人口缺損の迅速なる補給を、人口減退の急速なる挽回を、といふのが大戰當時の人口政策の一般論調であつたことは至極當然なことである。當時日本に於ても同様の意見が多く現はれてゐたが、就中興味ふかきは經濟論叢『マルサス生誕百五十年記念號』に寄せられたる小川博士の一論文『歐洲戦後の人口』⁷⁾である。博士はその結末に於て、「然らば其戦後に於ける人口政策は如何と云ふに、人口増加と云ふこと、如何に優れたる人を増さんかと云ふことに歸着する。是に至て戦後の人口問題は、人口の多きに窮すると云ふ問題でなく、却て其反對に向て走る問題であることを知るべきである。マルサスを地下に起し之を見せしめたならば、夫れ之を何と云ふであらうか」と述べられてゐるのである。

かくの如き一般論調の沸騰せる中であつて、しかも、かのドエリング氏の調査速報によれば壯丁の戦死・國民死亡の増加・及び出産減少を加算してドイツ一國だけでも實に六百三十萬の人命損害と稱せられてゐる當の

- 6) Charles Gide, La reconstitution de la population française (Revue Internationale de Sociologie, Mars 1916). —經濟論叢3卷5號(大正5年11月)に米田庄太郎氏の紹介文あり。
- 7) 小川郷太郎氏・歐洲戦後の人口(經濟論叢2卷5號、マルサス生誕百五十年記念號、大正5年5月)。

ドイツに於て、若しも茲に少數の學者があり、そして今こそはドイツに人口過剩の危機が到來しつゝあると説き出でたとすれば、世人はこれを何と目したであらうか。然しながら——私見によれば——これら少數の學者こそ人口問題の眞實の意味を把握してゐたのであつて、世人は戦後、爲替慘落の半面に労働大衆の實質賃銀が低下し、廻り廻つて世界恐慌期に入り大戦による人命損害と正に相ひ匹敵せる空前の尨大なる失業者を街頭に投げ出すに至る迄、これら少數學者の慧敏なる洞察を理解し得なかつたのではなからうか。兎まれ、これら少數の學者に屬してゐたのはケルン醫科大學のロエンネ博士、及び當時フライブルク大學のモムベルト教授等であつたやうに思はれるのである。以下その所論を傳へる。

二、モムベルト・戦後の人口政策（一九一六年）

人口學者としてのモムベルト教授の活動は一九〇七年の處女作「ドイツ人口動態の研究」¹⁾を以て始まつてゐるが、より包括的なる一般人口理論的基礎に於て戦時のドイツ人口問題を取扱うた最初の著作は、大戦第三年に、當時從軍中脱稿したと稱する一書「戦後の人口政策」²⁾である。

本書に於て著者はまづ、人口問題の核心は人口と經濟との關聯にあるとの根本見地を表明力説する。「若し一國に於て——人口増加を全く顧慮しないで——國內の財生産の人口一人當りの收穫が上昇するなら、食糧餘裕(Nahrungsspielraum)換言すれば當該國又は當該國民經濟の人口包容力(Bevölkerungskapazität)は上昇せる

- 1) Paul Mombert, Studien zur Bevölkerungsbewegung in Deutschland in den letzten Jahrzehnten mit besonderer Berücksichtigung der ehelichen Fruchtbarkeit. Karlsruhe 1907.
- 2) Mombert, Bevölkerungspolitik nach dem Krieg. Nahrungsspielraum und Volkswachstum in Deutschland. Tübingen 1916.

ものと云はれる。この表現の下では……つまり國內人口數と國民的財生産の大小との關係が理解されてゐるのであつて、財生産の大小は結局、直接又は間接に、全人口の生活程度の高低に對する前提を爲すものである。」従つて人口は増加するとも食糧餘裕にして少くとも前者に比例して擴大するならば問題がなく、反對に食糧餘裕の上昇が人口の増加に及ばないか或は人口の減退以上に減退するならば問題が起る。前の場合を經濟的進歩と云ひ、後の場合を經濟的退歩と云ふ。「かくて人口増加は社會政策的には、即ち生活程度の點に關しては有利にも不利にも作用し得る。おしなべてドイツに於ては最近の數十年間、前の場合が事實であつたと云へるであらう。」然るに大戰と關聯して、或は大戰前から既に、多くの學者政治家はドイツ出生力の減退を憂へ、結婚の奨勵、産兒の奨勵を論じつづけた。それ等はしかし多く食糧餘裕との關聯を洞察せざるメルカンテイリスト的見解に過ぎなかつた。——「善意と祖國愛だけでは何ら人口政策を行ひ得ない。人口政策には、部分的には今後非常に困難となるべき經濟對人口間の關聯への洞察も亦加はらねばならない。」³⁾

進みて著者は、謂ゆる食糧餘裕——本稿に於ては以下これを人口扶養力と呼ぼう——の概念を分析し、廣狹二義に於ける人口扶養力と、絶對的及び相對的意義に於ける人口扶養力と、更に客觀的及び主觀的意義に於ける人口扶養力との三通りの區別を行ひ、⁴⁾これに基いてドイツ國民經濟の批判的考察に移つてゐる。思ふに國際交通の開けたる現代に於ては何處の一國と雖もその人口の扶養を自國內の財生産にのみ頼るものはなく、多かれ少なかれ他國との財の交易に依頼してゐるが、この他國に依頼する部分をも含めたるものが「廣義の人口扶

3) Mombert, Bevölkerungspolitik, S. 3-6.

4) Mombert, Bevölkerungspolitik, S. 7-12.

養力」である。

いま、この見地よりドイツ戦前の對外貿易を検すれば(次表参照)、輸出入總額は一八八一—一八五年より一九一—一三年に至る期間に六十二億マルクより百九十四億マルクに、そして入超額は一八八六—一九〇年より一九一—一三年に至る期間に三億一千四百萬マルクより十四億五百萬マルクに増大した。一八八一—一八五年には輸出はなほ輸入よりも大であり、貿易差額はアクティヴであつた。品目について見れば、輸入のうち工業製品も増大したが、しかしより一層急激に増大しつゝあつたのは工業原料品と食糧及び嗜好品であり、これに對してドイツは主として工業製品の輸出を以て賄つてゐたのである。食糧及び嗜好品の輸出は一九〇一年以降相對的にほど固定してゐた。たゞ實數に於て約二倍となつたに過ぎぬ。茲から次の如く云へる——「狹義の人口扶養力をドイツ國內に於て全く本格的に高める可能性は種々あるとしても尙ほ且つ他國に依頼する範圍は非常に大であるので、氣候その他の理由からドイツで全く獲れないものを除いて云ふも、この輸入の大部分は將來これを缺くことの出来ないものだといふことは全く判り切つてゐる。」「茲に確かに一の悲劇が存する。」「ドイツの國家的並に政治的自存の理由よりすれば吾々は能ふ限り強大なる人口増加を求めらる。だがこれを達すること多ければ多い程、吾々は益々増大する分量の原料と食糧とを求むることを餘儀なくされ、従つて吾國の他國への經濟的依頼は増大せざるを得ない。この増大が政治的にも不利に働きかけることは今次の戦争で吾々の知悉する所である。かくて一方では人口數の増大は吾國の政治的權力を強化するものであるが、それは又他方で

の 對 外 貿 易

(單位百萬マルク)

輸		出				計	出超又は 入超 (-)
工業原料品 (半製品を含む)		工業製品		食糧及嗜好品 (家畜を含む)			
實數	%	實數	%	實數	%		
756.8	23.9	1,730.3	54.7	624.5	19.7	3,111.6	23.8
630.6	19.4	2,062.5	63.5	468.8	14.4	3,161.9	(-) 314.4
677.3	20.9	2,013.2	62.0	412.5	12.7	3,103.0	(-) 935.1
914.4	22.0	2,539.3	61.3	493.4	12.0	3,947.1	(-)1,116.4
1,226.1	23.9	3,305.7	64.5	484.0	9.5	5,015.8	(-)1,081.1
1,668.9	24.8	4,425.1	65.8	640.0	9.5	6,734.0	(-)1,642.8
2,359.0	25.9	5,754.0	64.8	880.0	9.7	8,993.0	(-)1,404.9

は、據つて以て惹き起さるゝ經濟的依頼の増大によつて政治的權力の弱化を招來する。」

それ故に狹義の人口扶養力はたとへ些少であつてもこれを擴大することは非常に望ましいわけである。けれども假りに輸入を減じたとすればどうなるか。それは輸出を減ずることになるのは自明であり、従つて又増加する人口を扶養し得ないに至る。特に工業製品の輸入が前述の期間に六億三千五百萬マルクより十五億八百萬マルクに増大したことは、比率の上では兎も角として、増加する人口のためには必要なる輸入増加であつた。否、常に輸入だけではなく輸出も亦、人口増加の基礎となるものである。けだし國內で獲られたる及び他國より輸入せる原料で工業製品を造り、この製品中に投下されたる労働でより高き價値を賦與せしめ、これを以て他國より輸入せる原料及び食糧の支拂に充てるといふ方法によつて、増加する人口に労働機會と利潤獲得の可能性と資本構成の手段とを與へ得るのであつて、この關聯の中に原料及び食

年平均	輸				入		計
	工業原料品 (半製品を含む)		工業製品		食糧及嗜好品 (家畜を含む)		
	實數	%	實數	%	實數	%	
1881—85	1,447.3	36.1	634.8	20.4	1,005.7	32.2	3,087.8
1886—90	1,501.7	41.8	906.0	25.6	1,068.6	29.6	3,476.3
1891—95	1,721.5	40.8	884.4	20.6	1,432.2	33.6	4,038.1
1896—00	2,328.6	43.7	1,053.5	19.7	1,681.4	31.6	5,063.5
1901—05	2,899.0	45.0	1,184.0	18.5	2,013.9	31.0	6,096.9
1906—10	4,647.3	55.4	1,315.1	15.7	2,414.4	28.9	8,376.8
1911—13	5,809.1	55.8	1,507.9	14.5	3,080.9	29.7	10,397.9

歐洲大戰當時に於けるドイツ學者の人口問題觀 (南)

糧と工業製品との國際的取引の人口政策的意義が横はつてゐる。かくて「經濟の現段階、即ち一般に平和時には需要に應じたる量の食糧を他國から獲る可能性の開けてをる一國民にあつては、人口過多、換言すれば人口扶養力過少の作用は、もはや往時に於ける如く食糧の一般的缺乏といふ形態では現はれず、實は労働機會の缺乏となつて現はれる。世界經濟の時代に於ては人口増加に、特に労働可能年齢に於てそれが増加する程度に應じて、充分なる報償の伴ふ労働機會を得させることが出来る所では、人口の過多は起り得ない。現代に於て飢餓に苦しまねばならぬ人間が存するのは食糧が缺乏するためではなくて、實は報償の伴ふ労働機會が缺乏せるか又は不十分なる結果、必要なる食糧を購ふ貨幣手段が缺けてをるからである。この理由よりして、吾々にとつては、人口扶養力の擴大及び安固は充分なる且つ豊かに報償せらるる労働機會の造出及び安固と同意義である。」従つてこの見地よりして特に肝要なる事柄は、輸出品中出来るだけ大きな割合が、

種々なる生産段階を通過すべき工業製品から成立つてをるといふことで、「要するに他國との交易に現はれる一國の人口扶養力の大小はその國の輸出が工業製品から、別して多量の労働が包含されてをる如き工業製品から成立つ程度に應じて増大する。」然るにこの觀點よりすればドイツ貿易の近年の發展は必ずしも有利ではなかつた。輸出額中工業製品の占むる割合は一九〇六—〇七年六七・六%、一九〇八—〇九年六四・七%、一九一〇—一一年六四・二%、一九二一—二三年六四・〇%といふ風に寧ろ減少しつゝあつたのである。⁵⁾

次に今一つ、ドイツ近年の人口動態及びこれに影響を與へんとする方策の検討に對して重要なるものとして著者の指摘するのは、客觀的及び主觀的意義に於ける人口扶養力の概念である。これは生活程度を考慮に入れたものであつて、「人口扶養力は客觀的には同じであつても、主觀的には即ち人間の意慾と欲望とに關はらしめて云へば可變的である。」換言すれば、「客觀的意義に於ける人口扶養力とは現存の生活資料と人間の生理的に必要なる欲求との關係であり、主觀的意義に於ける人口扶養力とは現存の生活資料と一定の——無論變化はするが——生活程度に基ける人間の欲求との關係である。⁶⁾」ドイツの婚姻率が前世紀末から低下傾向を現はし、一八七一—七五年の九・四（人口千につき）より一九一三年の七・七にまで低下した事情は、右の主觀的意義に於ける人口扶養力の狹隘化によつて説明せられねばならないし、更に又、近年に於ける出生率の低下には嚴密に云つて繁殖能力の減退と繁殖意思の減退とが同時に作用してゐると見られ得るけれども、繁殖意思の減退には矢張り主觀的意義に於ける人口扶養力の狹隘化——大家族の經濟的負擔——が主役を演じてゐる。従つて

5) Mombert, Bevölkerungspolitik, S. 23-37.

6) Mombert, Bevölkerungspolitik, S. 11-12.

婚姻率及び出産率を高めんとする人口政策は何よりも租税政策によつて、今日多産家族に多く背負はされてを
る経済的壓迫を均分化することを目指さねばならない。⁷⁾

要するに「ドイツの富は最近の一世代間に、過去一世紀間にも嘗つてなかつた程の速さで増大した。人口の
凡ゆる階層に於ける生活程度は強大なる膨脹を経験した。狭義に於ける人口扶養力は農業の進歩に基いて本格
的に増大した。但し人口数はそれ以上に強力に増加したので吾國の需要の益々増大する部分は他國より獲られ
ねばならなかつた。廣義に於ける人口扶養力も増大した。技術の大進歩、國民勞働の生産力の増大、我國商業
の發展は、食糧及び嗜好品を益々増加する程度で他國から輸入することを可能ならしめた。しかもこれによつ
てドイツの富の増加が今日まで不利なる影響を受けるといふことにはならなかつた。然るに部分的には、出産
率減退といふ事實に現はれてをるやうに、主觀的意義に於ける人口扶養力が減退せること、即ち人間の欲求が
全體としての人口扶養力に比してより急速且つ強力に増大したといふ、異常に強大なる傾向が觀取せられる。
而してこの主觀的契機に、即ち人間のこの意慾と欲求とに出産率減退の主原因が横はつてをり、そしてこの傾
向の發展と強化とにドイツ將來の人口増加上の根本的危險が伏在してゐる。」⁸⁾

かくしてモムベルト教授は既に、戦前の數十ヶ年間に、一には外國貿易上の構造の變化から、又一には生活
程度の異常の上昇から、廣義に於ける人口扶養力と主觀的意義に於ける人口扶養力とが、前者は輕微ながら而
して後者は非常に、狹隘化しつゝあつた事情を解明し、ドイツ人口の將來に横はる「根本的危險」をさへ指摘

7) Mombert, Bevölkerungspolitik, S. 71-95.

8) Mombert, Bevölkerungspolitik, S. 104.

した。然しながら軍事行動のなほ著しくドイツ側に有利であつた本書執筆の當時として、ドイツ人口扶養力の擴大になほ多分の希望と期待とを繋ぎ、戦果としての領土の擴大をさへ説いてゐたのである。

三、ロエンネ・國民經濟的醫學的見地より見たる

ドイツの人口増加と人口政策（一九一七年）

その翌年のことである。經博・醫博のロエンネ氏は『國民經濟的・醫學的見地より見たるドイツの人口政策¹⁾』を發表した。その最初の二章で記述せられてをる人口統計的取扱は茲で割愛する。興味あるは第三章以下の國民經濟的見地よりする問題の取扱である。

氏は云ふ、「然し肝要なることは單に、人口の増加はいかなる犠牲を拂うても促進すべしといふことではない。これに必要なる前提として國家の採るべき方策は、より大ならんとする人口を良く養ふといふことである。人口の一大部分には絶えず食糧問題の勞苦があり、生活資料調達の困難に悩んでゐる。そして人口の大多數は殆んど日がな一日、その日の糧のために働いてゐるのである。」一八八〇—八二年に Mulhall の計算せる所では、國民所得中食費の占むる割合は最富裕層に於て三十七乃至三十八%、然るに最貧層では六十%に上つてゐる。かくて國民は貧しければ貧しい程益々多くの所得部分を食費に投するのであつて、同じことは子女數の多い家庭に當てはまる。それ故に「食糧問題は凡ゆる國民の最重要なる問題である。この問題にして適當に

1) Friedrich Lönne, Deutschlands Volksvermehrung und Bevölkerungspolitik vom nationalökonomisch-medizinischen Standpunkt. Wiesbaden 1917. — 内務省地方局刊・戦時列國地方資料第十輯・戦時及戦後に於ける列國の人口問題（大正8年1月刊）161-299頁に本書の抄譯收めあり。

解決せられたならば他の生命的に重要な國家問題、就中人口問題の解決に對する第一の根本條件が供せられたと云へる。食糧問題は既に平時に於ても國民大衆の根本問題であるが、戰時に於ては事情によつて國民全體の存亡を決するものとなる。果せる哉今次の大戦に於て吾が敵國はドイツ國民を飢餓によつて屈服せしめんことを希つたのである。かくて國家は凡ゆる犠牲を拂つて出產獎勵を行はんとする前に、先づこれに應じたる食糧生産の増大といふ經濟的前提を創り出さねばならない。モムベルトの言葉を借りて云ふなら、「國民の鬭争は食糧餘裕を中心として、或は同じことであるが人口包容力を中心として、旋廻する』のである。」

茲に於て著者ロエンネ氏は「食糧餘裕」——人口扶養力——の概念、及びその廣狹二義に於ける區別を説明する。要旨は前掲モムベルト氏の所論とほぼ同じい。進みて著者はドイツの人口増加が戰前既に狹義の人口扶養力を遙かに超えてゐたこと、しかし他方でこれは益々増大する勞働力の一源泉であつたことを指摘して、ドイツがこの勞働力を、數十億に上る輸入を介して、國民財産を減ぜしむることなしに寧ろ反對に資本構成に充當し得るやうに利用した所以を説く。即ち「吾々は先づ吾國の勝れたる科學と技術とのために世界專賣とも稱せられし大量の商品、例へばアニリン染料を輸出した。しかし吾々は次いで何よりも吾國勞働力を、原料の形で他國より輸入せる商品の完成化に充當し、これを完成品の形で再び他國に輸出した。輸出品の質が高まれば高まる程、特に個々の原料が完成品に至る迄により多量の勞働を要する生産行程を通過せねばならなくなればなる程、即ち完成品迄の所要勞働量が高まれば高まる程、輸入は原料の輸出によつてではなく主として所要勞

働力によつて大部分支辨してなほ餘りあるのであつた。茲に於て人口政策の任務は、原料及び半製品の輸出は出来るだけ少なからしめ、他方その加工精製に多量の労働力を要する所の、而して吾國の別して勝れたる技術と科學とによつて收支よく償ふ所の多くの完製品を輸出すべく配慮する點にあらねばならない。

更に平和時に於ては、不斷の人口増加により労働力の總量が増大するならば、而して輸入原料及び食糧を化して完製品と成しこれを輸出して利を收め、以て生活費を凌駕したる所要労働を通じて更に將來の生産に充當され得る新資本が獲得されるとするならば、人口増加は國民經濟的見地よりして大いに歡迎すべきことである。人口扶養力は或る程度完製品の輸出に比例するもので、これを促進することは周到なる人口政策の根幹である。かくて人口増加と狹義の人口扶養力と對外的な通商關係との間には不斷の交互作用が存するのであつて、特に狹義の人口扶養力がほゞドイツの戦前に於ける如く過少となれる場合に然りである。然るにこの交互作用にして阻害せられるならば禍である。特にこの連環が破壊せられるならばそれこそ大變な禍で、過大の人口數に立脚せる政治的權力とそれによつて惹き起されたる經濟的依頼との矛盾相剋は、その完全なる、事情によつては破局的なる現象となつて現はれる²⁾」

然るにドイツがその敵國の飢餓方策を一蹴して經濟的にも尙ほ——本書執筆の當時に於て——戦勝を續けつつあるのは、著者の指摘する所では(一)戦前の黄金時代に著しく高まりし生活程度を切下げたこと、(二)堅實なる國內農業の力、特に戦時に於て他國との競争止みし時に於けるその擴充、及び(三)慧敏果敢なる下

2) Lönne, Deutschlands Volksvermehrung, S. 22-27.

イツ軍隊の經濟工作、特にベルギー・フランス・ロシア・ルーマニア等々の經濟的並に戰爭經濟的に重要なる地域の次々の攻略と資源の確保、に負うてゐる。一九一七年の當初に於てドイツ及びその與國の占據せる地域は、ベルギー・フランス・ロシア・ルーマニア・セルビア・モンテネグロ・アルバニアを通じて計五十五萬一千八百四十七平方キロに上つた。但しその當時フランス人の手中にありしドイツ領土は九百平方キロ、ロシア人の手中にありしオーストリア・ハンガリー領土は二萬八千二百三十一平方キロであつたから、これを差引けばドイツ側の純占據地面積は五十二萬二千七百十六平方キロで、ほゞドイツ本國の面積に匹敵し得る大いさであつた。「かゝる大獲得を得たることに對しては、優越類ひなき吾が軍隊並にその統率者に永久の感謝を捧げねばならない」と著者は云ふ。特にルーマニア占領の軍事的並に經濟的意義は絶大であつた。³⁾

然しながら他方、犇々と押し寄せ來たるドイツ戰時の食糧難は、決して著者をして樂觀的見解に終始せしめなかつた。その末章の「反省と期待」に至るや著者は重ねて、人口問題の核心が人口と經濟との關聯にあることを力説し、「強力なる出生超過によつて獲得せられたる政治的權力は經濟的依頼によつて將來長く動搖を來たす虞れはない。人口増加は狹義の人口扶養力が充分であり且つ前者と歩調を保つ場合にのみ望ましい」と唱破する。そして戰時の食糧難に實感を得たるものゝ如く實に次のやうな逆説をさへ述べてゐるのである。

即ち若し從來の人口政策家の希望が満たされて一八八〇年より一九一四年まで人口千に對する四〇位の割合で増加し續けてゐたとすれば、この期間にドイツには更に八百三十一萬六千の人間が生れてゐたであらう。而

3) Lönne, Deutschlands Volksvermehrung, S. 27-37.

してこの數字よりその期間に死亡せし人數を差引くともなほ吾々は七百萬の人口を養はねばならなかつたであらう。然るにこれだけの人口を養ふためには年々——コンラード教授の計算によれば——パン粉約十三億キログラム、牛乳約二十四億リットル、肉一千六百萬キログラムを要したであらう。「更に、出産減退は一九〇〇年頃に特別に激しくなつたのであるから、これら大多數の人々が單なる消費者であつて非生産者であり、従つて國民經濟及び戰爭目的に對して不生産的である點に想到するならば、またドイツはこの七百萬乃至八百萬の人間によつて確かに一層工業國となり農業は益々衰退したであらうことを併せ考慮するならば、今日イギリスの飢餓方策が吾々に大危險を齎らし、恐らくは吾國を破局に陥れたであらうことは疑ひがない！ たゞこの見地よりして余は吾國の人口政策家が氣付かさざりし出産減退の光明面を指摘したい。而してたゞこの觀察點よりして余は近年の出産減退を救濟的偶然事の一に數へんと欲する！」⁴⁾

だが、不幸なる「破局」は遂にドイツを襲ふた。五ヶ年の大戰は國民の期待とは全く反對に、ドイツ領土の擴大どころではなく、その割讓を餘儀なからしむる結果となつた。巨額の戦債や賠償負擔や植民地喪失などは別としても、本國領土の割讓だけで人口は先づ十%を失つた。然るに他方、耕地は十五%を、家畜數は十一%を、鉛鑛は二十六%を、鐵鑛は七十五%を失ふと云ふ風に、人口に比して資源はより一層激しく狹隘化したのである。かくして、——大戰は事情を一變せしめた。ドイツ現下の喫緊の問題はこの國經濟の人口扶養力は今後いかに形成されるか、そしていかなる結果をこの變化が人口數と生活程度とに及ぼすかといふ問題にあるこ

4) Lönne, Deutschlands Volksvermehrung, S. 64-66.

とを注意し、「近き若くは遠き將來に向つてドイツ國民經濟の人口扶養力が戰前の時期に於けるよりも著しく狹隘となるとすれば、吾々が戰爭によつて失つた所の、又その結果として今後更に蒙るであらう所の大なる人口損害は果して人口對經濟間のこの必要なる均衡を招來せしむるに充分であるか、それとも又、過剰人口の危険を期待せねばならなくなるのではなからうか？」といふ意味ふかき疑問を提起し來つたのは、モムベルト教授の第二著『ドイツに對する過剰人口の危険⁵⁾』なのであつた。

四、モムベルト・ドイツに對する過剰人口の危険（一九一九年）

本書は前出「戰後の人口政策」の續論として書かれた。その論調が著しく悲觀的となつてゐるのは想像に難くあるまい。著者は先づ一方に於て「人口數及び人口増加に及ぼす戰爭の影響」を記述する。しかし統計資料のいまだ充分に備はらなかつた當時のこととて、壯丁の戰死・國民の死亡の増加・婚姻及び出産の減退について部分的な報告を記すに止め、かの普佛戰爭の人口動態上に及ぼせる影響から類推する方法に訴へてゐる。普佛戰爭の幾十倍もの規模に於て行はれたこの大戰が人口動態上にいかなる異變を生ぜしむるかは想像に餘りあらう、と著者は云ふ。而して實に茲から、何よりも人口恢復をと主張する論者が續出した。しかし、著者によれば、人間損害の恢復が問題ではなくて、ドイツ經濟狀態の將來の發展、ドイツ人口扶養力の形成如何が焦眉の問題である。「この人間損害にも拘らず、又吾々が當然に豫期せねばならぬ人口増殖上の今後の減退に

5) Mombert, Die Gefahr einer Uebervölkerung für Deutschland. Tübingen 1919.

も拘らず、ドイツに於て生計と子孫とを見出し得るよりも遙かに多くの人間を有することになるかも知れない。従つて吾國にとつての人口問題は全く違つた内容を取り、人口政策には全く別個の任務が生ずる。けだし戦争とその結果によつて全く變化したのは人口數と人口増加とだけではないのであつて、同じことが吾國に於ける人口扶養力の大きいさと發展とに起こつてゐる。しかも人口數と人口扶養力との兩者は相互に一定の均衡を保たねばならない。必要なる人間數が缺けて來るか或は人口扶養力の大きいさが缺けて來るかに應じて、人口政策は全く違つた任務を果さねばならぬのである。¹⁾

茲に於て著者は「經濟及び人口扶養力に及ぼす戦争の影響」を考察する。著者の所見では、戦後ドイツの人口扶養力を狹隘化せしむるものと考へられる要素に三つある。(一) 經濟上非常に重要な領土の喪失が直接に人口扶養力の狹隘化を意味することは明白である。(二) 第二要素は對外貿易上の變化である。廣義の人口扶養力擴大の途が原料を輸入して工業製品を輸出するにあることは前著で述べられた。然るに戦争負擔によつて他國人口の購買力が減することは明白だが、これは措いても、ドイツは對外爲替を維持し恢復するために、又他方では戦債及び賠償金を支拂ふために、今後常に能動的な貿易差額を保持しなければならぬ。しかし、かかる貿易差額を保持するためには輸入を減するか、輸出を高めるか、或は兩者を並行せしめねばならぬけれども、戦前の貿易趨勢を注意して見ると、一九〇六—〇七年より一九二—一三年に至るまで輸出中原料及び半製品は比率に於て二十三・九%から二十六・五%に増加し、食糧及び嗜好品(家畜を含む)は八・六%から九・七

1) Mombert, Die Gefahr, S. 7-16.

％に増加し、他方完製品の割合は六十七・六％から六十三・八％に低落した。この傾向にして續く限り、出超を期待し促進することは却つて人口扶養力と労働機會とを相對的に減縮せしむる結果とならざるを得ない。尙、これには種々の不利な原因がもつれ合ふ。賃銀嵩と税金嵩とは生産原費を高めて世界市場に於けるドイツの競争能力を弱めるであらう。更に(三)近き將來に於てドイツの處理し得べき國民經濟的資本量を考慮に入れねばならぬ。各國ともこの資本——生産手段——を喪失した。戦争はそれを破壊し消盡した。工場や機械は修理乃至更新されることなしに使用しつくされ、土地は充分に施肥されることなしに耕作しつくされた。思ふに資本は専ら國民所得から、節約を通して、構成されてゆく。然るにこの資本構成は戦後極めて不利となるであらう。

以上三項目につき述べし所を「要約すれば、何よりも先づこの不利なる影響を及ぼすであらう所の要素は二つある。第一には豫想せらるゝ吾國輸出の減退と、この輸出に際して必要なる原料及び半製品が完製品に比して増加することと、ドイツ市場に於ける工業製品輸入増加の危険とである。これは直接に人口の廣汎なる層に於て労働・及び生活可能性を減ぜしむるの發展である。第二は國民經濟的資本の缺乏と、同一方向に作用すべき資本新構成減少の危険とである。第一の要素には非常に急速に發現すべき謂はゞ急性的危険が孕み、第二の要素は、然かく急性且つ迅速には發現しないけれども、例へば慢性的疾患の如くそれだけ長期にわたる所の危険を醸成する。」かくて過剩人口の危険は眼前に控へてゐる。而してこれによく對處するに成功し得ざる限り、

(a) 國民生活程度のこれ以上の低下、又は(b) 海外移民の増加、或はその双方によつて、破れたる均衡が恢復せられるの他ないのである。²⁾

進みて著者は「人口政策の任務と方法」を論ずる。「人口政策の最高且つ最重要なる任務は現存の人口扶養力を擴大し、安固ならしめ、以てこれと現存の人口數との必要なる均衡を樹立するにあらねばならない。」³⁾ このためには、まづ(一) 國內市場の強化が考へられる。ドイツの將來には労働・及び生活可能性に不利なる影響を及ぼすべき國際的要素が多々存するのであるから、將來に向つてこの危険と不利益とを出来るだけ少なからしめることは他國への經濟的依頼からドイツをして出来るだけ獨立せしむることに成功するや否やに懸つてゐる。故に問題は國內市場の強化、換言すれば狹義の人口扶養力をいかなる程度に擴大強化し得るやの可能性にある。(二) 次は資本の經濟、即ちその調達と充當とを併せ目指したる資本政策である。一國に於て資本の缺乏が大となればなる程、現存の資本を全體的見地より見て經濟的に最重要と思はれる目的に向つて出来るだけ完全に充當することが益々必要となつて來る。⁴⁾

以上二點は生産の側面に關する事項であるが、生産と社會的關係との間にも密なる相互作用が存する。こゝから(三) 社會的統制が問題となる。特に労働時間と賃銀と労働効率との關係については既にプレントナーの確證はあるけれども、それは果して戦後の新事態にも適用し得るものなりや。況んや戦後に於ける所得水準化の新傾向は果して經濟的側面に好影響を與ふるや否や。かくて戦後に豫想せらるゝ過剰人口の危険、即ち人口

2) Mombert, Die Gefahr, S. 17-35.
 3) Mombert, Die Gefahr, S. 38-39.
 4) Mombert, Die Gefahr, S. 39-57.

扶養力の狹隘化と労働機會の減退とを考へるならば、「人口問題が今日まで社會問題一般の核心であつたこと、そしてこの意味で一切の人口政策、就中一國の人口扶養力に着眼せる一切の人口政策が言葉の最も眞實なる意味に於ける社會政策でもある」ことが首肯せられる。⁵⁾

最後に(四)人口數と人口増加への影響として、今度は國家的又は政治的見地よりする考察が行はれる。しかしこの見地よりすれば人口政策の方向は歴史的に全く種々異なつてゐる。メルカントイリズム時代には無條件に人口増加が謳歌されたが、次いで出でたマルサスの見解はナポレオン戦争後の經濟的自由主義と長き平和の時代とを背景として命脈を維持し、更に新マルサス主義の全盛時代を経て、今世紀に入るや再び國民的對立が激化するに呼應して出産率減退の克服運動と人口増加獎勵の風潮とが各國を襲つて來た。——かくて最後に著者は云ふ。

「ロバート・マルサスの學説は果して正當なる内容を有するか、果して人口増加に對してはもはや何らの經濟的限界は存せざるか、といふ思想は、ドイツの經濟生活がかくも強大なる隆昌を致した時代、従つて全體として吾が國民經濟の人口扶養力が疑ひもなく人口數よりも遙かに強力に膨脹せる如き時代には、退去するを得た。

今や情勢は全く一變した。過去數十年間にドイツ國民がかくも強力にその數を増加せしめた原因たる經濟的諸前提は、戦争の勃發によつて多かれ少なかれ中絶されるに至つた。茲に於て人口政策の任務も變らねばなら

5) Mombert, Die Gefahr, S. 59-66.

ない。今後何年にも亘つて、能ふ限り強大なる人口増加を考へるといふことは吾々の任務ではない。吾々の主目的は、自國內に於て現に存せる人口數に生計と子孫を得させるべき經濟的諸前提を挽回することにある。⁶⁾」

大戰當時に刊行せられたるモムベルト教授の單行書は以上二つであるが、最後にもう一つ、一九二五年プレクターノ教授生誕第八十回祝賀論文集に寄せたる關係論文に説き及んで置きたい。

五、モムベルト・世界大戰に照合しての

人口問題と人口理論（一九二五年）

本論文¹⁾に於て著者はまづ「人口増加と戦争」の關係を説き、國家の膨脹慾たる謂ゆるイムペリアリズムは人口増加國にとり必然の過程であり、這般の大戦は少くともドイツにとつては「人口扶養力のための闘争」に他ならなかつたことを論ずる。けれどドイツは戦前の人口増加によりその扶養力は狹隘と感ぜられてゐたのである。²⁾

茲に於て著者は再び「人口増加に及ぼす戦争の影響」を説き、老なる人命の損失と戦後に於ける人口増加の緩慢とを指摘する。しかし人口問題は人口の側からだけでは成立しないもので、常にその扶養力との關係に於てのみ成立する所以を説き、そして云ふ。「こゝで先づ、人口扶養力が戦後時代に經驗せる諸變化……を度

6) Mombert, Die Gefahr, S. 67-69.

1) Mombert, Bevölkerungsproblem und Bevölkerungstheorie im Lichte des Weltkrieges. In: Festgabe für Lujo Brentano zum 80. Geburtstag. München u. Leipzig 1925. II. Bd. S. 379-424.

2) Mombert, ibid. S. 381-390.

外に置くならば、人口の側からこの點に關して起こつた諸變化はヨーロッパの人口問題を戦前に比して何ら本質的に異なつた光の下に現はさなかつたと云はねばなるまい。人口増加は確かに戦争によつて緩慢となつた。従つて單に人口の發展をのみ眼中に置くならば、マルサスの意味に於ける積極的妨げを云々し得るであらう。然しながら大部分の關係諸國にとつては人口數が既に久しく狹義の人口扶養力を著しく凌駕して増加してをつたといふ事實は、戦争によつて少しも變へらるゝには至らなかつた。況んや人口扶養力は戦争及びその影響によつて人口數よりもなほ一層強力な後退を経験したのであつて、人口扶養力に對しても戦争は積極的妨げとして作用し得るのである。³⁾」

さてこの意味で、「人口問題の純經濟的側面」として「人口數と經濟との關係が戦後時代の世界經濟に及ぼす影響」が次いで考察せられる。大戰の結末がドイツ國民經濟の、従つて人口扶養力の基礎を震撼せしめた事情は前に指摘したが、他の交戦諸國も亦多かれ少なかれ經濟狀態の悪化を経験した。否、交戦國だけではなく、中立國も然りであつた。かくして中立國に於ても過剩人口問題が語られ始めたのである。⁴⁾ 世界に於ける主要財貨の生産及び消費が戦後いかに減退したかは次表の示す通りである。

次に一九一三年の生産高を一〇〇として戦後一九二二年に於ける生産高の減退を國別につき現はすと、イギリスでは石炭四三、銑鐵七四、鋼鐵五二、銅七七、鉛六七、錫九〇、而して棉花消費五二であり、フランス（一九一三年分はエルサス・ロートリンゲンを含む）では石炭三七、銑鐵六二、鋼鐵五八、銅九九、鉛五四、錫六二、

3) Mombert, Bevölkerungsproblem, a. a. O. S. 395.

4) 例へば J. Wyler, Das Uebervölkerungsproblem der Schweiz. (Separatabdruck aus der Zeitschrift für schweizerische Statistik und Volkswirtschaft, 59. Jahrg. 1. Heft). Bern 1923.

戦前・戦後の世界生産及び消費

品名	1913年	戦後		
		1920年	1921年	1922年
金の世界生産高(単位キログラム) ..	692,040	504,033	496,250	477,894
銀の世界生産高(") ..	6,964,318	5,418,624	5,348,207	6,410,843
棉花の世界消費高(単位1,000捆) ..	20,402	—	15,078	18,809
茶の主要産地よりの輸出高(1,000キログラム) ..	350,900	288,700	296,400	309,600
綿糸の世界生産高(単位1,000封袋) ..	3,162,035 ¹⁾	—	2,766,151 ³⁾	2,684,153 ⁴⁾
甜菜糖の世界生産高(単位1,000トン) ..	8,908 ²⁾	—	5,052	5,261
石炭の世界採掘高(") ..	1,212,143	—	956,827	1,032,329
コーカスの英・白・米製造高(") ..	58,619	—	28,666	42,200
英・白・和・及びスカンデナヴィア諸國に於ける労働組合加盟者の失業率(加盟者1,000のうち)	38	46 ⁵⁾	18 ⁷⁾	15 ⁶⁾

1) 1909—1913年平均 2) 1913—1914年 3) 1921—1922年 4) 1922—1923年 5) 白を除く

而して棉花消費五二であり、合衆國では石炭一三、鉄鐵四六、鋼鐵三七、銅五四、鉛一二、錫四二、而して棉花消費一二であつた。更に國際貿易について見ると、イギリスでは一九一三年に輸出入總額十二億九千四百萬磅であつたが、一九二〇年には十一億六千二百萬磅、一九二一年には九億八千七百萬磅、一九二二年には十億八千二百萬磅となり、フランスでは一九一三年に百五十三億法に上つてゐた輸出入總額は一九二〇年には百五十億法、一九二一年には百二十一億法、一九二二年には百二十九億法となつたのである。⁵⁾

以上の數字は戦争とその結果とにより世界の經濟的基礎がいかなる程度に狹隘化したかを示すに足るであらう。少くともヨーロッパに於けるこの減退は人口數の減損よりも遙かに大であつた。まさしくハロルド・ライト氏の云へる如く、近代の戦争は單にマルサスの意味に於ける人口増加

5) Mombert, Bevölkerungsproblem, a. a. O. S. 401-402.

上の妨げには屬しない。事實に於て「戦争は過剰人口に對する救済たるところか、生活程度を生存資料の水準まで抑止する所の最強力なる要因の一たること」があるのである⁶⁾。戦勝國が直接に領土の獲得により榮えたのは人間生活が主として土地に頼つてゐた時代であつた。國際交通の緊密なる近代に於ては、戦後の影響を受けるのは戦敗國だけではない。戦勝國も亦これに捲き込まれざるを得ないのである。

所で一定の生活程度例へばドイツ戦前の生活程度が經濟的基礎の狹隘化によつて減退する場合、而してこの減退が人口數の減少によつて除去し得る場合には、吾々はこゝに一の過剰人口現象を云々し得る。而してモムベルト教授によれば、この現象は歐洲戦後二つの形態をとつて現はれた。一は爲替弱國で、他は爲替強國で。ドイツは前者の好例であつた。即ちこゝでは貨幣價值の持續的低落と關聯して——それは一面輸出奨勵として作用し、従つて國內市場では一の活況さへ生じた——失業數は一九二三年の夏まで非常に僅少であつたが、これに反して實質賃銀が本格的に戦前の水準以下に落ちた。例へば一九二二年に於けるドイツの肉消費量は一九一三年に比して僅かにその四十二%、パン粉消費量は僅かに七十三%に過ぎなかつた。なほ嗜好品及び再生産用の主要消費は、コーヒは戦前(一九一三年)の十六萬四千トンより戦後(一九二二年)の三萬七千トンへ、茶は戦前の四千三百トンより戦後の二千八百九十トンへ、棉花は戦前の百七十萬二千捆より戦後の百八萬三千捆へ、米は戦前の十六萬七千トンより戦後の十萬トンへと減退し、たゞコ、ア原料の消費のみは戦前の五萬一千トンより戦後の八萬四千トンへ増加したに過ぎなかつた。然るに他方、爲替強國では實質賃銀や勤

6) H. Wright, Population. London 1923. p. 140.

め人及び官公吏の報給はドイツよりも遙かに高かつたが、失業數は非常に大であつた。即ち一九二二年六月現在に於て組合労働者一千人についての失業者はドイツ僅かに六人に過ぎなかつたに對して、イギリスは百五十七人、ベルギーは二十六人、オランダは九十二人、スウェーデンは二百九人、而して合衆國は百二十二人であつた。

要するに、人口數と人口扶養力との背反は爲替弱國と強化國との双方に於て見られるわけで、しかも後者では多數の失業といふ形態をとり、前者では實質賃銀の著大なる減退となつて現はれたのである。この現象の原因は確かに種々あるであらう。しかし根本的にはドイツの賠償負擔がそれを惹き起した、といふのが著者の見解である。賠償負擔は結局國民所得を削減して支拂はれるより他なかつた。而して國民所得の削減が國民消費基金の減少となり、又財の將來の生産のためにする資本構成を弱めるのは明白である。しかもドイツのこの窮迫状態はやがて他の交戦國に、そして中立國にまで、波及せざるを得ず、遂にヨーロッパの全面的な人口過剩へと發展して行つた。洵にリーフマン教授の云へる如く、ドイツの貧困化は他國の貧困化に導いた。即ち實際間の富の均衡、又は貧の均衡が、招來されたのである。

なほモムベルト教授は右の論稿に先立ち、同じブレンターノ教授の生誕第七十回祝賀論文集に『ドイツに於ける資本構成と資本需要の問題について』⁷⁾を陣中より寄稿し、又戦後一九二六年の社會政策學會ウィーン大會

7) Mombert, Bevölkerungspolitik, a. a. O. S. 403-405.

8) Liefmann, Theorie des Weltwirtschaftlichen Reichtumsausgleich, in: Weltwirtschaftliches Archiv, Bd. 19. 1923. S. 558.

9) Mombert, Zur Frage von Kapitalbildung und Kapitalbedarf in Deutschland. In: Festschrift für Lujo Brentano zum 70. Geburtstag. München u. Leipzig 1916. S. 379-400.

には「西歐に於ける過剰人口現象¹⁰⁾」を報告した。前者に於ては、國民經濟上の資本需要の増加は一方では *extensiv* に、即ち人口の増加につれて必要となり、他方では *intensiv* に、即ち經濟的勞働の集約化（高度化）につれて必要となるが、しかしドイツに於ける資本構成は戦前から既に對外貿易の不利なる發展の結果非常に鈍り出したことを指摘する。資本構成の弛緩は勞働機會の縮小化を結果する。かくて「こゝで問題となるのは人口包容力と資本構成との關聯である。ドイツ國民經濟の現段階では前者は決定的に後者によつて影響せられる。吾々が吾國の人口増加に對し年々役立たせ得る所の勞働機會の大小は専ら資本構成に依存してゐる。吾國の人口増加を必要且つ有利として辯護せんとする者は……一の意識的なる資本構成政策に吾國の最重要なる任務を認めねばならない」と論じてゐる。又「西歐に於ける過剰人口現象」は前段迄に紹介し來つたドイツ過剰人口論と趣旨を同じくするものであるが、なほ聊か視角を廣めて（一）輸出の減退、（二）國內市場に於ける購買力の減退、（三）商工業に於ける合理化の増進、及び（四）就業人員の増加の四點より戦後の西歐諸國に於ける過剰人口の發現を論斷してゐる。就中、戦後に於ける就業人員の増加が部分的には國民生活狀態の悪化の一結果、即ち過剰人口の一徴候であると爲してをるのは注意に値ひする。けだし就業人員の増加は家計を助けんとして婦女子が職業戦線に入り込むことも意味されるからである。

六、結

語

10) Mombert, Uebervölkerungserscheinungen in Westeuropa. In: Verhandlungen des Vereins für Sozialpolitik in Wien 1926 (Schriften d. V. f. S. Bd. 172). München u. Leipzig 1926. S. 161-178.

これを要するに、歐洲大戰當時、ドイツに於ては二つの對蹠的な意見が並び存してゐたのである。即ち一は多數者の意見で、政治的、軍事的、社會衛生學の見地から大戰による老大人命損失を憂へ、何よりも先づ迅速なる人口恢復を圖らんと主張せしもの、他は少數經濟學者の意見で、人口問題は單なる人口數の問題ではなく常に人口數とその扶養力との割合の問題であるとの思想から、大戰は人口を損せる以上にその扶養力の根源を破壊することによつて兩者間の均衡を攪亂し、こゝに改めてドイツは、否な主要交戰國の大部分は次々に、過剩人口現象を現はすに至つた。従つて戦後の人口政策は單なる人口増加策ではなく、何よりも先づ人口扶養力の挽回策であらねばならぬと説くものであつた。而してロエンネ氏、及び特にモムベルト教授はこの後者中の代表者であつたのである。

思ふに近代の大戦争は、さきに述べた通り、人口の側に非常に激しい戦時状態を招來せしむるものであるが、と同時に人口扶養力の側に——場合によつては人口の側に與へたよりも遙かに激しい程度に——後退を餘儀なくせしむるものである。この間の事情は、平時に於て、より多く工業及び貿易によつて國民に労働機會と生計手段とを與へ、そしてこれを通じて絶えず新たな資本構成を行ひつゝあつた一國、即ちモムベルト教授の用語で表現すればより多く廣義の人口扶養力に頼りつゝあつた一國が、戦争によつて殆んど一舉にこの扶養力が削減せられたといふ如き場合、例へば本稿に於て主として説かれたる大戰當時のドイツの如き場合を想像することによつて、極めて明瞭となるであらう。

マルサスは嘗て、人口増加に對する妨げの分類に於て、戦争を以て主觀的には“vice”に、客觀的には“positive check”に屬するものとし、結局、周期的に起り來る戦争は謂ゆる“superabundant population”を一掃するものであるといふ風の説き方をした。これも往時に於ては誤りでなかつたであらうが、しかしマルサスはこの際、近代の戦争が外國貿易の縮少、労働機會の削減、資本構成の中絶を介して彼れの謂ふ“means of subsistence”の獲得量に對して與へる甚大なる後退的影響を明察してはゐなかつたやうに思はれる。しかも實際間の財の交換を通じて各國が相互に廣義に於ける人口扶養力に主として頼つてをる現代に於ては、戦時及び戦後の不利なる影響を受けるのは戦敗國だけではない。戦勝國も、而して中立國でさへが、この戦争の激甚さに比例して同様の現象を呈し來たることあるべきは歐洲大戰がこれを證示した所である。

但しお断りする迄もなく、筆者は本稿の考察を以てその儘直ちに、種々なる特殊要素を含む現下東亞の問題に結び付けようとするものではない。近き前途に控ゆる東亞經濟の新規建設は特に日本の側に於ける人口扶養力の限りなき擴大を約束するものである。本稿の意圖する所は只、歐洲大戰の遺したる一つの貴重なる史話を傳へ、兼ねて人口問題及び人口政策の眞實の意味と方向との探索に資せんとするにあるのみである。

(一九三八年十一月)